姫路地域に暮らす外国人のための日本語教材開発を目指した基礎研究[1]

クロス　尚　美
山　崎　　恵

0．はじめに

近年、グローバル化の進展とともに社会環境の変化は著しい。地域に住む外国人の増加に伴って、文化庁が「生活者としての外国人」[2] に対する日本語教育の内容・方法の充実に向けて標準的なカリキュラム案や日本語教育ハンドブック等を作成している[3] が、今後は、さらに各地域に根差した情報を盛り込んだ教材開発が必要になってくるであろう。

また、教材自体もインターネットの普及とともに紙媒体の教材から ICT を活用した電子媒体の教材へと移行しつつある。

本研究は、姫路地域に住む外国人を対象に、彼/彼女らがこの地域で安全かつ快適に暮らせる手助けになるような教材を開発するための基礎研究である。その手始めとして、全国的に日本語学習者数が急増しているベトナム語母語話者に特化し、日本語音とベトナム語音とを対照させたデータベースを作成する。漢越語と漢字熟語の対照語彙リストを基に、漢越語と漢字熟語の語音変換に着目することで日本語の発音矯正と語彙習得に役立つ学習教材としてスマホアプリが有効であることを提案する。

1．姫路地域に暮らす外国人の現状[4]

姫路市は兵庫県の西南部に広がる播磨平野の中央部に位置しており、古くから西日本の交通の要衝として発展してきた。総人口約53万５千人（2016年８月現在）で、兵庫県内二位の商工業と人口を擁し、中核市に指定[5] されており、播磨地方の中心都市である。2015年に世界文化遺産の姫路城が平成の大修理を終え、グランドオープン後は外国人観光客も増え続け、今後さらなる増加が見込まれている。

現在、姫路市外国人登録者数は10,220人（2016年３月）で、10年前の2006年

の11,248人から漸減し2014年には10,064人まで減少した。この減少には、2008年の世界的経済不況や2011年の東日本大震災による帰国者が増え、韓国及び朝鮮、中国、ブラジル国籍の外国人が減っていることが影響していると思われる。しかし、翌2015年は10,136人とやや増加している。姫路市外国人登録者は上位の韓国、ベトナム、中国、朝鮮、フィリピン、ブラジル6か国のほか、その他が51ヵ国・地域におよび多様化が進んでいることが窺える。特に姫路市には、以前インドシナ難民姫路定住促進センター[6]があったため、今もベトナム国籍の外国人住民が多いことが特徴である[7]。

在留資格別にみると、多い順に「特別永住者[8]」(46.0%)、「永住者」(23.7%)、「技能実習」(8.7%)、「定住者」(8.3%)、「日本人の配偶者等」(3.8%)、「留学」(2.6%) となっており (2016年7月)、「特別永住者」と「永住者」とで69.7%を占めている。日本全体の在留資格別では、「永住者」(31.4%)、「特別永住者」(15.6%)、「留学」(11.1%)、「技能実習」(8.6%)、「定住者」(7.2%) となっており (2015年12月)、「永住者」と「特別永住者」とで47%であり、姫路市は日本全体と比較すると「生活者としての外国人」の割合が高いことがわかる。また、ベトナム国籍の在住者に注目すると、「技能実習」は2015年2月は147人であったのに対し、2016年7月には324人となり、この1年半で177人も増えており、「永住者」1,100人、「定住者」633人に次いで多い (2016年7月)。2014年度からEPA (Economic Partnership Agreement 経済連携協定) によるベトナムからの介護福祉士・看護師候補者の受け入れも開始された。介護人材不足を補う策として、技能実習制度に「介護分野」の導入が検討されており[9]、その分野でもベトナム国籍の在住者は増加する可能性がある。

姫路市が外国人市民の日本の生活での問題点等についてアンケート調査を行っている[10]が、その中の「必要とする生活情報 (複数回答可)」には、上位に「災害の情報[11]」、「年金の情報」、「姫路市の助成金 (子ども手当や出産費用の助成など)」、「健康保険の情報」、「仕事の情報」、「子育てや学校の情報[12]」が挙げられている。在住期間の長短や滞在目的の違いによって、必要とする生活情報も様々であろうが、災害情報や医療関連情報などは全ての在住外国人にとって必要な優先度の高い情報である。

「生活情報を手に入れる方法・場所」については、多い順に「日本語の新聞、雑誌、テレビ、ラジオ」、「日本人の友人や知人」、「家族・親戚」、「姫路市からのお知らせ」、「インターネットのサイト」、「自治会の回覧板やビラなど」となっている。姫路市では在住外国人が必要とする情報を多言語で提供できるよう取組んでいる[13]が、さらにアプリなどを活用して、在住外国人にわかりやすい情

報提供の在り方を検討する必要がある。

2．電子媒体での日本語教材概観

文化庁文化部国語科では「日本語教育コンテンツ共用システム NEWS」を運営しており、日本語教育に関する情報（教材、カリキュラム、報告書、論文、施策資料、等）を横断的に検索できる。そのサイトで紹介している日本語教材の多くは、PDF を web 上に公開して、URL からダウンロードできるようにした教材であった。

スマホ用アプリによる日本語学習教材も見られるが、JLPT（日本語能力試験）対策のものが多い。例えば、「日本語クイズ（JLPT　N1-N5)」は英語・中国語・韓国語に対応しており、N5から N1までの日本語が学習できる。クイズ形式でひらがな・カタカナの読み練習から漢字の読みや文法問題もカバーしており、全部で1600問あり、学習者が空いた時間に気軽に問題を解くことができる[14]。

漢字教材の例として「常用漢字筆順辞典」（Ver4.1.6）は「簡単検索」（漢字の筆順や読みを手書入力及びキーボードから検索)、「リスト（検索)」（クリップボード、読み、区分、部首での検索が可能)、「履歴」（過去に調べた漢字の一覧表示)、「確認」（覚えた筆順の確認）などで簡単に学習できるようになっている[15]。

発音教材の例として「ゆにおん－ユニティちゃんと日本語発音練習」がある[16]。これは日本語教育研究の観点から、音素ごとの音調比較による発音指導を目的とした研究の一環で開発されたもので、例えば「ぴったり」という発音を「ぴたり」と言えば,「『っ』を短く発音している」という指摘を得られるが、音そのものを認識するのではなく、音の長さのみで判別するため、「ぴったり」の代わりに「たっぷり」と発音しても正解になるなど、問題点が残る。

アプリ教材のメリットはパソコンに比べて普及率が非常に高い上に自律学習を促し、効率よく学習できる点であろう。

地域に特化したアプリ教材に関して、管見のかぎりでは見られなかった。

3．ベトナム語母語話者に向けた日本語教材開発

ベトナム人日本語学習者は、日本語の発音に困難を感じることが多い[17]。ベトナム語母語話者の発する日本語音声では、母語の特徴である咽頭の緊張に起

因する声門閉鎖やきしみ音を含め、さまざまな問題がある[18]なか、アメリカ、中国、韓国、オーストラリアなどに比べ、ベトナムは日本語教育の基礎研究も教材開発もほとんど進んでいない[19]状況にあるとの指摘がある。

また、ベトナムはもともと漢字圏であったため、日本語とおなじように、漢語に起源をもつ漢語熟語、いわゆる漢越語があり、現代ベトナム語語彙のおよそ6割あるいは7割が漢越語である[20]が、表音文字としてラテン文字が採用されてからは、漢越語の存在すら、若者の間で認識されなくなってきている。一方、日本語の中の漢語語彙は、全体のおよそ6割[21]であり、漢越語と日本語の中の漢語との間には、多くの共通点があるものと考えられる。

トラン・バン・タン（2017）は、漢越語の辞典から4,000語を抽出し、そこからさらに現在でも使われていると思われる3,000語について、その認知度を調べている。

漢越語と日本語の中の漢語では、次の例のように語順が逆になっているものも多いが、

例：大学・院　viện đại học　（院・大学）

音が共通することが多く、これは日本語学習上、ベトナム語音との比較から日本語音の習得につながると同時に、語彙数を増やす語彙習得にもつながると考えられる。

3．1　漢越語と日本語漢語の比較

ベトナム語が表音文字を採用していることから、潜在的な漢語系のことば（漢越語）には、日本語の中の漢語の音読みにも似た読みがある。

表1

偉人	イ　ジン	vĩ nhân
偉大	イ　ダイ	vĩ đại
個人	コ　ジン	cá nhân

表1に示した3語は、ベトナム語で日本語と同様の意味を持つ。日本語の音読みが「イ」である漢字「偉」は、ベトナム語でvĩとなる。表1の「偉大」においては、その二番目の語音đại も、日本語の「ダイ」に似ている。一方、日本語では「人」には「ジン」の他に「ニン」という音読みがある。「ニン」に似たベトナム語音がnhânであり、「偉人」と「個人」のベトナム語表記と共通している。

表 2

胃	イ	vị
胃液	イ　エキ	vị dịch
位置	イ　チ	vị trí
地位	チ　イ	trí vị

表 2 が示すように、日本語の音読みの「イ」は、ベトナム語では vịとなることがある。vịは vi とともに、その現われる環境から i の異音であると思われる。ちなみに、「置」と「地」の音読みである「チ」が、ともにベトナム語では tríとなることにも注目したい。

表 3

病院	ビョウ　イン	bệnh viện
病人	ビョウ　ニン	bệnh nhân

表 3 では、2 音節からなる viện が「イン」に対応している。表 2 の「地位」に対応する trí vị と同様に、「イ」が vi となるようである。また、表 1 の「偉人」や「個人」で見た「人」と同様に、病人の「人」のベトナム語読みは、nhân となる。付け加えて、日本語の「詩人」は、漢越語では thi nhân となり、ここでも「人」が、日本語の音読みとは違い、nhân で統一されていることが分かる。

表 4

意見	イ　ケン	ý kiến
意味	イ　ミ	ý nghĩa

表 4 では、「意見」と「意味」を比較する。「意」の音読みである「イ」は、ベトナム語でýとなる。これもまた、i の異音であろう。「意見」の二番目の語「ケン」が、ベトナム語で kiến となり、日本語音の「ケン」に近いことは興味深い。

表 5

医学	イ　ガク	y học
大学	ダイ　ガク	đại học

表 5 では、もう一つの i の異音 y が提示されている。二番目の「学」の音読み「ガク」は、ベトナム語で học となり、これは「大学」を意味するベトナム

語の đại học と共通している。さらに、đại は「偉大」の「大」でも同様の発音となり、đại と表記される。

表1から表5で示した例は、ごく一部ではあるが、日本語の中の漢語語彙の音読みと、現代ベトナム語に残る漢越語の読みに、共通するものが多いことが予測できる。さらに、ベトナム語母語話者が語頭の音を、喉を軋ませながら強く発音する[18]ことを考え合わせると、「イ」音の発音矯正に力を注ぐことの意義が明白となる。

3．2　漢越語データベースの構築

本研究では、学部4年次生のトラン・バン・タンと同3年次生のディン・ティ・トゥ・チャンが共同で作成した約4,000語からなる漢越語と日本語漢字熟語対照表をもとに、二人の協力を得て、漢越語の音声データベース構築に着手した。前節で述べたように、日本語の中の漢語と漢越語との間には、規則性が見られる。これを体系的にまとめ、どの漢語の字音にどの漢越語の字音が対応するのかを分析する。

前節で考察した表1－5の情報をもとに、表6を示す。

表6

大(きい)	(đại)
大学	đại học
学生	học sinh
学長	hiệu trưởng
大学院	viện đại học
院長	viện trưởng

初級で出てくる基本的な和語から漢字を選び、それを用いて連想的に語彙を広げていくと、必ず語音の似ているものがある。和語である「大きい」に対応する漢越語はない。しかし「大」という漢字は、初級前半で学ぶ漢字のひとつであり、また発音も「ダイ」と đại で近似している。その「大」からの連想で、発音の近い「大学」、「学」からの連想で「学生」、「学長」、「大学院」と語彙を広げる。「大学院」は漢越語では「院大学」という語順になるが、viện が「イン」に通じる発音であることが認識できる。ベトナム語の viện が、日本語では「イン」となることに気づき、さらに、「院」viện と「長」trưởng と組み合

わせると、「院長」viện trưởng となることに着目する。日本語の「長」が trưởng となることが、繰り返しインプットされることが習得につながる。

このように、学習者の置かれた状況により、漢越語と日本語の中でそれに対応する漢語とを組み合わせ、語彙を広げると同時に、ベトナム語音から日本語音へ、両言語の音表記を比較しながら学んでいくことが可能となる。

3．3　漢越語データベースから日本語教育アプリへ

日本語習得における漢越語の有用性については、松田他（2008）の報告があり、旧日本語能力試験出題語彙全約 8 千語に占める二字漢字語 4 千語と漢越語との意味の一致状況を調べ、漢越語が中級以上でのみ有意義であると結論付けている。しかし、本研究では、漢越語の個々の字音に着目し、日本語音とベトナム語音との関係性に規則性を求め、そのコーパス化を図る。漢越語と漢字熟語の対照コーパスを基に、特にベトナム語母語話者が苦手とする拗音と促音の組み合わせや、長音・短音の区別など、日本語の発音矯正と語彙習得のための学習教材をスマホアプリとして開発する。（付録参照）

本研究では、ベトナム語母語話者が日本語習得に際し、一番強く感じている発音の問題と漢字語彙習得の難しさは、漢越語の積極的な利用で解決に導かれるものと考える。さらに、その媒体としては、スマホアプリがもっとも有力であると考える。

4．おわりに－まとめと今後の課題－

国内外を問わず外国人日本語学習者数の急増、それに伴う学習目的の多様化、同時に日本を訪れる外国人観光客の増加、近年の日本語教育界を取り巻く状況の変化には著しいものがある。教育環境も ICT の活用、e ラーニング、自律学習、アクティブ・ラーニングなど新たな教授法が試行されている。2020年には東京オリンピックが開催される予定である。政府は、我が国の少子高齢化に伴い、外国人材の活用・受け入れ環境の整備等、様々な外国人施策を展開しようとしている。その中で外国人に対する日本語教育の重要性も再認識され始めている。

本研究は全国的に日本語学習者数が急増しているベトナム語母語話者に特化している。漢越語と漢字熟語の語音変換に着目することで日本語の発音矯正と語彙習得に役立つと考えた。日本語音とベトナム語音とを対照させたデータベースを構築し、さらにそれを基にスマホアプリとして開発するための基礎研究で

ある。

本研究で開発を目指すスマホアプリには音声認識と音声の文字化機能を持たせる。当面の課題はデータベースの完成である。

[付録]

スマホアプリの語彙学習の参考例

[注]

1　本稿はクロス尚美と山崎恵の共同執筆であるが、1章は主に山崎、3章は主にクロスが担当した。

2　「外国人労働者問題関係省庁連絡会議」で2006年の春ごろから使われ出したという。外国人も「地域で暮らす生活者」であり、住民であるということを示す言葉。

3　外国人が日本社会の一員として日本語を用いて円滑に生活を送ることができるよう、文化審議会国語分科会が2010年～2013年に「標準的なカリキュラム案」「活用のためのガイドブック」「教材例集」「日本語能力評価について」「指導力評価について」「ハンドブック」の6種類を作成して、公開している。

4　在住外国人に関する統計情報等は姫路市国際化推進プラン検討懇話会（山崎もその一委員で、任期は2016年7月28日～2017年3月31日）での配布資料に拠っている。

5　1996年4月に全国で初めて中核市に移行した。中核市は政令指定都市に準じる権限を持つ都市。

6　姫路市仁豊野に1979年12月から1996年3月まで設置されており、そこで日本語教育、社会生活適応指導、職業の斡旋・紹介等が行われた。

7　2015年以降に姫路で住民登録を行ったベトナム人の在留資格は上位が「技能実習」（240人）、「留学」（98人）、「定住者」（65人）で、「技能実習」や「留学」の在留資格を持つベトナム籍住民も増加している。

8　第二次世界大戦終戦前から引き続き居住している在日韓国人・朝鮮人・台湾人およびその子孫の在留資格。出入国管理特例法（1991年）によって永住資格が認められている。

9　介護現場で働く外国人の受け入れ拡大につながる外国人技能実習制度の適正化法案と、出入国管理及び難民認定法（入管法）の改正案が衆院本会議で可決した（2016年10月25日）。政府は今国会での成立を目指しており、両法案は今後、参院で審議される。この適正化法案が成立して施行されれば、政府は技能実習の対象職種に新たに「介護」を加える方針で、入管法の改正では、日本で介護福祉士の国家資格を得た外国人を対象に「介護」の在留資格が設けられることになる。

10　姫路市国際化推進に係る外国人市民向けアンケート調査（無作為に抽出した15歳以上の外国人市民3,000人に対して2015年3月13日～3月27日実施。有効回答数563人）。

11　具体的には「災害の大きさや避難場所の情報（ラジオ・インターネット等)」、「多言語での案内（パンフレットなど)」などがある。

12　具体的には「子どもの将来の仕事が心配」、「子どもが親の母語を話せないことが心配」、「高校や大学の入学試験制度、奨学金や学費がわからない」などがある。

13　公式ホームページでは全8カ国語（英・中・韓・仏・西・葡・独・越）による外国語自動翻訳を提供している。

14　https://itunes.apple.com/jp/app/ri-ben-yukuizu-jlpt-n1-n5/id477031259?mt=8（2016.10.30アクセス）

15　https://itunes.apple.com/jp/app/chang-yong-han-zi-bi-shun/id453410542?mt=8（2016.10.30アクセス）

16　https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.ac.puk.union（2016.10.30アクセス）

17　レーチュン・ズン、松田真希子、金村久美　(2010)

18　金村久美、松田真希子、磯村一弘、林良子　(2012)

19　松田真希子、タン・ティ・キム・テュエン、ゴ・ミン・トゥイ、金村久美、中平勝子、三上喜貴　(2008)

20　石原（2014）には「ベトナム語の総語数の6割を占める」(p.28）とあり、佐藤（2015）には「現代ベトナム語は語彙の約7割が漢語由来といわれており、概念語や専門用語に多い」(p.256）とある。

21　金田一京助、佐伯梅友、大石初太郎、野村雅昭編（2002)『新選国語辞典第8版』小学館

[付記]

本研究は姫路獨協大学特別研究助成費研究（平成27年度、平成28年度）の交付を受けて行われたものである。

[参考 URL]

文化庁　http://bunka.go.jp（2016.10.24アクセス）

文化庁文化部国語科「日本語教育コンテンツ共用システム NEWS」
http://www.nihongo-ews.jp/　(2016.10.24アクセス)

姫路市文化国際課（国際交流センター）(2016.10.16アクセス)
http://www.city.himeji.lg.jp/s20/2870820.html

姫路市 HP（2016.10.16アクセス）
http://www.city.himeji.lg.jp/info/profile.html

［参考文献］

石原嘉人（2014）「ベトナム語話者に対する漢字語彙の指導について」琉球大学留学生センター紀要＝Bulletin of International Student Center University of the Ryukyus（1），27-39

金村久美・松田真希子・磯村 一弘・林良子（2012）ベトナム語母語話者の日本語音声における喉頭の緊張（研究発表,日本音声学会2012年度（第26回）全国大会発表要旨），音声研究 16(3)，101-102,

佐藤章太（2015）「ベトナム語母語話者における漢語由来語彙と固有語彙の区別」『東京大学言語学論集』 36，255-270

トラン・バン・タン（2017）「ベトナム語母語話者の漢越語の意識と日本語教育」姫路獨協大学外国語学部外国語学科2016年度卒業論文（未公刊）

中川康弘・小林学（2008）「ベトナム人日本語学習者の漢越語知識と漢字語彙習得についての一考察：現地における正誤判断テストとインタビュー調査から」『桜美林言語教育論叢』 4，75-91

姫路市文化交流国際課国際室（2012）『Hands on Himeji A Guide book for Living in Himeji 外国人のための生活ガイド』

文化庁文化部国語科（2015）『国内の日本語教育の概要』

文化審議会国語分科会（2016）『地域における日本語教育の推進に向けて』

松田真希子（2016）『ベトナム語母語話者のための日本語教育：ベトナム人の日本語学習における困難点改善のための提案』東京：春風社

松田真希子・タン＝ティ＝キム＝テュエン・ゴ＝ミン＝トゥイ・金村久美・中平勝子・三上喜貴（2008）「ベトナム語母語話者にとって漢越語知識は日本語学習にどの程度有利に働くか －日越漢字語の一致度に基づく分析－」『日本語教育論集 世界の日本語教育』18，21-33

レー チュン＝ズン・松田真希子・金村久美（2010）「ベトナム人日本語学習者の発音習得：発音熟達者のラーニングヒストリーからの提案」『日本語教育方法研究会誌』17(1)，62-63

A Preliminary Study for the Development of Japanese Language Teaching Materials for the Community of Non-Japanese Speaking People in Himeji

Naomi CROSS
Megumi YAMASAKI

The number of foreign nationals living in Himeji and visitors to the city from abroad is on the increase. The most prominent nationality of this international community is Vietnamese.

For those foreign nationals living in Japan, the ability to communicate with others in Japanese is essential. Vietnamese tend to find Japanese Kanji and pronunciation a challenge. Formerly Vietnamese language was, like Japanese, under the great influence of Chinese, and its writing system was based on Chinese characters. However, Modern Vietnamese uses Latin characters in its writing system and the younger generation tend not to recognise Kanji characters in Japanese, which have the same Chinese origin.

This study proposes the construction of a Sino-Japanese-Vietnamese database focusing on the sound of each Kanji by comparative analysis. The goal of this study is to develop a smartphone application that would recognise and transcribe the sound of Japanese Kanji compound words uttered by Vietnamese speakers of Japanese, while linking the pronunciation with that of implicit Chinese characters in modern Vietnamese.